

～新渡戸記念の～

『言葉の院外処方箋』

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

第40回『心の処方箋 ～ 悩みがスッキリ軽くなる ～』

『吉田富三記念 がん哲学外来 in 福島県立医大臨床腫瘍センター』での面談で、ご夫婦が、廣濟堂の本『がんに効く 心の処方箋 1問1答 ～ 悩みがスッキリ軽くなる ～』（2017年1月5日 廣濟堂出版）を持参されました。感動した。本の「はじめに」には、「これまで多くの患者さんやご家族からうかがってきた切実な悩みには、共通していることが多くあります。—— 現在 病気の悩みをかかえていらっしゃる方は、この本のQ&Aの中に、今のご自分の心の状態を改善できるメッセージやアドバイスがきっと見つかることと思います。」と紹介されている。各章の抜粋は、下記の如くのものである。

第1章 自分が がんの診断を受けたとき

- Q1: がんの診断を受け、パニックになってしまった。
- Q6: 自分の病気によって 家族に迷惑をかけることがつらい。
- Q21: 社会から切り離された気持ち、疎外感を感じる。

第2章 家族が がんになったとき

- Q1: がんの診断を受けた家族に どう接したらいいか？
- Q8: 「死にたい」「もうだめだ」などと言う患者を どうなだめたらよいか？

第3章 友人、知人として できること

- Q3: 友人として どんな話題が 患者に喜ばれるのか？
- Q5: お見舞いに行くタイミングは どうはかったらよいか？
- Q7: 末期の患者さんに 友人として できることは何か？

福島県立医大 臨床腫瘍センターのスタッフの方から『奥様のご心労も多いのですが、「憧れの先生に お会いできたので、これから頑張れる」とお帰りになりました。心にも 大きな贈りものを いただいたと存じます。』との心優しいメールを頂いた。涙無くして語れない！ 今回の『吉田富三記念 がん哲学外来 in 福島県立医大臨床腫瘍センター』は、「自分を見出すチャンス」の学びの時となった。筆者の小さな村（鶉峠）での「青虫が 蝶になる」日々の観察が、鮮明に蘇って来た。